



俳諧一葉集

後編

二

5
2179
7



作然丈

○
の草や根ささぬ山に
けりされ古き高き
の跡にけりきり

女角換

○
いふ跡厚も尺程あり
とらぬ跡厚も尺程あり
とらぬ跡厚も尺程あり

秋のゆるゆと
きりりきりり
つとむゆと

白令社見

○
一石清水の流
年暮る七ツ
かか一の
きしし
赤七

并夢を友とかみうた雨あけ
こころ晴らすいよはむしの名ゆゑ人の口からくさるる

とまは

○
一さる芳村の御あまの金子ニかざりて路に押付まゝ
る久しに届て平にたれとあふるのこころを

とまは

あはれ

○
あはれの人附る向うは白は中み人々を苦しめて私汗を

あはれとて予よはけ味難く解依るの内言ふのしきいそふんぬ
定のお趣ひをきくまきくそまをり東武にいらぬし更にお物

を附る

森のたけのやうききしき。えん

とくくまひ

草のあつ花は物屋とよみうら

二月上候

とまは

木園様

子と書

善哉おん疾人の甘句を文とみはるる信を更なる候は
誠しう有るは貴る戸跡をあら及よをら随而下る古は

此者より其の如く似たりとせしむる古は今未だ未だ一向の類しつゝ此の時
う秋風来りて芭蕉の言はるるく隠れんやとて此の一向一生の如
のうに存るるうらやうしうら鼻言くおとあふ肩の如く
胸をさすやうにわかれし

○ 飲酒一放起諸

もろくわの朝ももろくしの上を此きこしやうと海より
ととつた又加らんをういふ事をものり飲酒はとてあふ
此は至極余の存るる南無阿弥陀仏とてし新ひかひか生
すゝとていふとて一杯の如くおあは子胸ははれ但し
四種の書物とてしうたはは海高く決定とて改めしき法有
おととてさうらうを獲りいふういふおとて海高く大なる二そは

海河をぬきしとては性をもろくもいふ人をあきん人の
たふく二代の如くもあふとて一文不知無純の如くもあふとて
あふとてあふとてあふとて一向を海を飲つ

右飲酒一放起諸の言はれし人の言はるる
あふとて掛物とてあふとてあふとてあふとてあふとてあふとて
あふとてあふとてあふとてあふとてあふとてあふとてあふとて
あふとてあふとてあふとてあふとてあふとてあふとてあふとて

あふとてあふとてあふとてあふとてあふとてあふとてあふとて
あふとてあふとてあふとてあふとてあふとてあふとてあふとて

十七

十七

○ 女角丈

既手ら思外... 無事... 備... 少手のよみ...
 一海を飽ま... 是す... 是の...
 節... 肥... 是す... 是の...
 定家の骨を... 西行... 樂... 徳...
 一海通る... 大坂... 是... 是...
 其志... 手... 是... 是...
 西行... 徳... 是... 是...
 不通... 是... 是... 是...

二月十八日

とま

出水姫



酒... 水... 姫... 水... 姫...
 一... 水... 姫... 水... 姫...
 不... 水... 姫... 水... 姫...
 子... 水... 姫... 水... 姫...
 水... 水... 姫... 水... 姫...

卯内子

とては

山崎文

山崎文

ふれ人のこゝろをなすいさうちのま

○

一松宮系店くいの物さへ扇引さくさくおれゆへに
細手はるるいさるは角ハ服くハ草くハ汗服違異服
役不式能物も人の挨拶すくく手さう上る人の数りま
きぬさういさるはさういさる海は台挨拶の服はさ
るはさういさるはさういさるはさういさるはさうい
さるはさういさるはさういさるはさういさるはさうい
さるはさういさるはさういさるはさういさるはさうい
さるはさういさるはさういさるはさういさるはさうい

おるはさういさるはさういさるはさういさるはさうい
さるはさういさるはさういさるはさういさるはさうい
さるはさういさるはさういさるはさういさるはさうい
さるはさういさるはさういさるはさういさるはさうい
さるはさういさるはさういさるはさういさるはさうい
さるはさういさるはさういさるはさういさるはさうい
さるはさういさるはさういさるはさういさるはさうい
さるはさういさるはさういさるはさういさるはさうい
さるはさういさるはさういさるはさういさるはさうい
さるはさういさるはさういさるはさういさるはさうい

有

有

るすら入に又く可居可後、万子取寺秋の切りた小まき
の英勝の能くしきしものしあや

十月廿三日

とまは

か枝吹

○

光

一のう木

一井

一のう巨

一井

一のうれ

尺合

たくと命の社命子あしう言つてを修吉、おをうこ
あしと一森之井さうほ山あひしを名もあ
っかよら入る

一のう

とまは

か八姑

○

山内月桂雪門餅

屋後ね慈超州系

仰はハ障子あひくくよねね

火しらふくろりししんすのあ

時をさし能治の變化を起し、と許さる人うきあ
又怪然のあに居ぬ誓情、兼て宿ぬ他世あすく
ものけし

巻塚や貴きあさるあし

あ

あすの神りくまよあしあけ

中うま

浪化様

柳書

○ 此の御法儀のふりかへし本は...
いふにむす角の事もあはれ申す中...
きふふりしり

廿二

下り書

七

○ 号 是より山音 ころころ 残る辰

○ 柳松魚の振あらしりたけの原庄の但令...
とあつらんき 追付書上

柳書

○ ちさきつね

○ 又ころん小ねの中い初うらを

○ 此の御法儀は山と魚と本向...
むくま刺すの先構ふ所 困り入申す...
○ 是より人々うらまへ

七

○ 柳風丈

七

○ 二百御法儀の...
肝要とす...
○ 是より人々うらまへ

一季の事... 考治上
下入増山并の月... 御

十七日

晩山始

とまて紙

傘の破れ... 帳前... 雨... 帳前... 雨... 帳前... 雨...

七日

とまて紙

新美一升... 師... 酒... 井... 湯... 湯... 湯...

粉一升... 湯... 湯... 湯...

湯... 湯... 湯...

松岸... 湯... 湯... 湯...

松の始

とまて紙

おさくら始

口上... 湯... 湯... 湯...

口上

三人... 湯... 湯... 湯... 湯... 湯... 湯...

苗をハおろしあしんをのまきまよて他社と集りかきしん度
 きは台におまのあふりききのとくはわい、あつたきまよと付と取
 子脚の襪を損なひしは此脚の襪も破りしは好助が他社
 とやまをりしは何方ともく、路きき方後わい、ま休一週は休め
 して大垣大坂へついでにゆき、あつたきまよと付と取、あ
 づはゆつりしと、路ききまよと付と取、あつたきまよと付と取
 上方を往きしは、あつたきまよと付と取、あつたきまよと付と取
 大色残四枚は、あつたきまよと付と取、あつたきまよと付と取
 五枚并の小豆も、あつたきまよと付と取、あつたきまよと付と取
 とも、あつたきまよと付と取、あつたきまよと付と取、あつたきまよと付と取

十月九日

七と成

許六経文



遊りしは、あつたきまよと付と取、あつたきまよと付と取、あつたきまよと付と取
 指回をききし、あつたきまよと付と取、あつたきまよと付と取、あつたきまよと付と取
 文庫并、あつたきまよと付と取、あつたきまよと付と取、あつたきまよと付と取
 脚、あつたきまよと付と取、あつたきまよと付と取、あつたきまよと付と取
 せ、あつたきまよと付と取、あつたきまよと付と取、あつたきまよと付と取
 舎、あつたきまよと付と取、あつたきまよと付と取、あつたきまよと付と取
 除、あつたきまよと付と取、あつたきまよと付と取、あつたきまよと付と取
 存、あつたきまよと付と取、あつたきまよと付と取、あつたきまよと付と取
 け、あつたきまよと付と取、あつたきまよと付と取、あつたきまよと付と取

廿二日

七と成

秋風丈

歌多白切

おもひしきつらけりるやあはれ
花のうや古くあはれあはれ

ふ上

ふ上

○

尾一宮川方より家をもひいふたつあはれ科理ふれ
はくはあはれあはれあはれあはれ

ふ上

ふ上

三千里尾張大根のふ上

又

あはれあはれあはれあはれあはれ

味塩ハハナクあはれあはれ

り尾州廿五日のあはれあはれあはれあはれ
の記のあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

けあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

廿二

あはれ

終ふ丈

○ 柳陰のあはれあはれあはれあはれあはれ

一先く是方より一ツ先中より送らぬ事あるべし一ツ送らぬことのみ言
知れぬ方と攝理又より一ツのいふは此方若思の中より
休むべきなり

二先く是方より一ツ先中より送らぬ事あるべし一ツ送らぬことのみ言

東月廿四日

宗思居士

芭蕉

○
此中ハツ先より一ツ先中より送らぬ事あるべし一ツ送らぬことのみ言
知れぬ方と攝理又より一ツのいふは此方若思の中より
休むべきなり

一先く是方より一ツ先中より送らぬ事あるべし一ツ送らぬことのみ言

○
此中ハツ先より一ツ先中より送らぬ事あるべし一ツ送らぬことのみ言

十廿二日

白水文

○
此中ハツ先より一ツ先中より送らぬ事あるべし一ツ送らぬことのみ言
知れぬ方と攝理又より一ツのいふは此方若思の中より
休むべきなり

細代氏於の事より

梅のふりしけやうの木北極の花

ひの枝極、やうしとぬき能くしりくさくさ木もあめ

廿一々

枕書

片極夫

○

言ふ事流く中傍らりし事付中より起つふ事多し一は西は
ひさし、又流く程より、能く事多し、又流く程より、能く事多し、
多向、又流く程より、能く事多し、又流く程より、能く事多し、
やう、又流く程より、能く事多し、又流く程より、能く事多し、
先流く程より、能く事多し、又流く程より、能く事多し、
は、又流く程より、能く事多し、又流く程より、能く事多し、
心、又流く程より、能く事多し、又流く程より、能く事多し、

廿一々

又書

山向、やうし

○

言ふ事流く中傍らりし事付中より起つふ事多し一は西は
ひさし、又流く程より、能く事多し、又流く程より、能く事多し、
多向、又流く程より、能く事多し、又流く程より、能く事多し、
やう、又流く程より、能く事多し、又流く程より、能く事多し、
先流く程より、能く事多し、又流く程より、能く事多し、
は、又流く程より、能く事多し、又流く程より、能く事多し、
心、又流く程より、能く事多し、又流く程より、能く事多し、

六月八日

松三ノ様

松三

○

あし四月廿日申又と書下りて先大坂の如くをさすの
おみし申す

五月七日申すの状を速に承りて申す
久し伊賀、遠方届候り申す候、是れ許はぬは
ッ勤め家内お勤り申す候、此所度方、お志め候
申す候、是れ許はぬは、此所度方、お志め候、
申す候、是れ許はぬは、此所度方、お志め候、
申す候、是れ許はぬは、此所度方、お志め候、

一 物名久ハ春車、長のみを、物、秋三、白頭、
手まりり申す候、此所度方、お志め候、
申す候、是れ許はぬは、此所度方、お志め候、
申す候、是れ許はぬは、此所度方、お志め候、
申す候、是れ許はぬは、此所度方、お志め候、

きくめ、わな、わな、わな、わな、わな、
びん、びん、びん、びん、びん、

い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

一 寺の御起りて生誕の御うらみ

一 柳屋の御再會の御うらみ
一 けんたの御うらみ

元禄七年十月

一 支那の御うらみ
一 別れの御うらみ

大正九年

支那の御うらみの御うらみ
御うらみ

○

送物元

一 三日の御うらみ

御うらみ

一 貴方の御うらみ

同所

一 埋木

御うらみ

一 新式書入

是ハ松屋の御うらみ
御うらみ

一 文章及御うらみ

貴ハ松屋の御うらみ
御うらみ

御うらみ

○

一 御うらみ
御うらみ

一 藤屋の御うらみ

昔もも物言のくふふなるく作中といふこと
くふふなるく作中といふこと
くふふなるく作中といふこと

寛文十二年正月廿五日伊賀上野松尾氏宗房
約有折一と云ふ事

貝おひの 三十番仇詰合

松尾氏宗房撰

一番

左勝

あはひのくもや他はくしん心細

二本

右

事の家やあくくむすしん心細

三本

片のうの自のすふ他はくしん心細
受付る 右も又事の家はくく大きくしん心細
音の流るくしん心細
心細くしん心細

二番

猪子... 橋の引張

右 橋 一友

守る... 橋の引張

右 橋 一友

左 橋 一友

右 橋 一友

よねさをやめしや月か月のうけ

指盛子

たらのしのしを伴ふとてかたはらひの

あみ月を伴ふとてかたはらひの

ぬもまをいをの踊の物をもてかたはらひの

んてらにまをいをの踊の物をもてかたはらひの

十とち

十とち

左勝

行孝母

月の舟やとてかたはらひの

右

三子

月の舟やとてかたはらひの

あのをとてかたはらひの

あのをとてかたはらひの

のよんかたはらひの

あのをとてかたはらひの

あのをとてかたはらひの

あのをとてかたはらひの

あのをとてかたはらひの

あのをとてかたはらひの

十七

左

吉之

あのをとてかたはらひの

右勝

常新

あのをとてかたはらひの

あのをとてかたはらひの

今より左の昔よりとていふに、
一、左の口大いふあや

二十一番

左 脈

かやけろく、右のまきうけは

三本

右

くはれぬ、あし足、うのしお枝の

改是

はかりの紅葉のまきうけの

ぬのうら、うのしお枝のまきうけの

まきうけ、ぬのうら、うのしお枝の

右のまきうけ、うのしお枝の

大むらうとも、うのしお枝の

をまきうけ、うのしお枝の

二十三番

左 脈

まきうけ、うのしお枝の

餘林

右

まきうけ、うのしお枝の

改是

ぬのうら、うのしお枝の

通うもの

ぬのうら、うのしお枝の

うのしお枝の

うのしお枝の

うのしお枝の

二十方角

左 右

こころをかんくわゆるおのこ

勝云

右

こころをわめまののち

味次

たのこころのけいかんくわゆるおのこ

くどくをかんくわゆるおのこ

こころをわめまのち

おのこをわめまのち

おのこをわめまのち

おのこをわめまのち

おのこをわめまのち

おのこをわめまのち

二十七番

左

おのこをわめまのち

右

右 左

おのこをわめまのち

義正

おのこをわめまのち

おのこをわめまのち

おのこをわめまのち

おのこをわめまのち

延宝八歳次

庚申仲秋日

長春河師傳乃

[Faint, mostly illegible handwritten text in cursive style]

田舎之句合

才一首

左 女

竟清く白きとてくさくさくを伝へり

秋の農丈

右

かたみの野人

菜摘をりし白きとてくさくさくを伝へり

えんりのりハ老民の二りハえんりハ地はまじりて長き
まじり神皇の御命ありてやうてやうてとてえんりハ不二のけ
きをを伝へりてくさくさくを伝へりてくさくさくを伝へり
俊あふくやねのり菜摘をりてくさくさくを伝へり
あふくやねのり菜摘をりてくさくさくを伝へり

才二首

やうとてい批定の批さるるをいふ

中五

鬼又

左 特 地利程人

右

中人

極智多しれ目足れぬとて

地利といふは花にほろりて在人深切し又目足る事の

老のさくさくむやうし上野管中の極き又重なりては作

下座の如くゆらゆらある遊言差あふ

中六

左

農又

佐子いふくやあふく

右 勝

中人

やうに言ふもさういふとて

嘆き多し先手吟大言をすくはるるも若侍れは傳

受の事御世をせんもさういふてさういふ事おぼえ

て姑獲もさういふてさういふてさういふてさういふ

於拈多しとて且ぬのり此言をさういふてさういふ

さういふ道徳をいふてさういふてさういふてさういふ

中七

左

鬼又

今よりかたう淨瑠璃版のまますれ

右 勝

中人

何とてふ羽織結納ハま

まゝに海へくまひけねとてなれば、まゝに海へくまひけねとてなれば、
の中をくまひけねとてなれば、まゝに海へくまひけねとてなれば、
すべのさうまゝに海へくまひけねとてなれば、まゝに海へくまひけねとてなれば、
才へい

左 麻

忠 史

清カレく勢 破 保 しくまひ 勢の戸

右

忠 人

村 きた 海 の う を や き う しく
まの 度 の 花 の 念 佛 光 珠 塔 空 海 の う を と 行 け 大 の
あゝと 勢 の う しくまひ 勢の 戸
と 勢 の う しくまひ 勢の 戸
と 勢 の う しくまひ 勢の 戸

可ナラコヤ

才へい

左 村

忠 史

勢の 麦 穂 子 まゝに しくまひ 勢

右

忠 人

柳 跡 の 子 苗 穂 子 しくまひ 勢

勢の 麦 穂 子 しくまひ 勢の 戸
まの 度 の 花 の 念 佛 光 珠 塔 空 海 の う を と 行 け 大 の
あゝと 勢 の う しくまひ 勢の 戸
と 勢 の う しくまひ 勢の 戸
と 勢 の う しくまひ 勢の 戸

才へい

左

忠 史

海の花や海をこらう袖をきりぬ浪

右 藤

世人

何ぞいさぎすしほんぞふらんよ月雨闇

藤の木のいさぎすしほんぞふらんよ月雨闇
きりぬしぬのり川城のきりぬのりや
何ぞいさぎすしほんぞふらんよ月雨闇
きりぬしぬのり川城のきりぬのりや
何ぞいさぎすしほんぞふらんよ月雨闇

才十一

左 藤

世人

あやうしうよ花をく奪えん陳はさく

右

世人

故き火をく奪えん白く奪えん

枝を奪えぬけりよふれぬる奪えぬる
枝を奪えぬけりよふれぬる奪えぬる
枝を奪えぬけりよふれぬる奪えぬる

枝を奪えぬけりよふれぬる奪えぬる
枝を奪えぬけりよふれぬる奪えぬる
枝を奪えぬけりよふれぬる奪えぬる

才十二

左

世人

その花を奪えぬけりよふれぬる奪えぬる

右 藤

世人

其物の清き奪えぬる奪えぬる

其物の清き奪えぬる奪えぬる

石の根を奪えぬけりよふれぬる奪えぬる

石の根を奪えぬけりよふれぬる奪えぬる

才十三

才十三

才十六

左勝

分限者も未くハ秋の夕暮をも推し

右

秋の心は沙ハ依れ高き

又舟の夕暮は沙の宿光依りてんしをきま

やありの宿しるも仍大福山を地も和尚もき

同フ着テ依りて舟を觀するもあれ一輪をえ

対る神のよくぬ君をよも仍て右の句閑に

才十七

左

破の町暮れ了大町を眺めり

忠文

右勝

芋を極くむをよみぬれや

右の白里の破れいん古し破の町と之妻交る

ハ破れいんも妻交るやいんハ折竹の中し心有

いんハ折竹の中し心有又芋の葉を向をいんハ折竹の中し

くすのき竹を越心有これと叙異雨の起し

夜和月首色直と色と色と色と色と色と色と

才十八

左勝

白の里を雨葡萄かつた甘き

忠文

右

紀伊新山をみんおと

忠人

嵐をよそふてはなをいそぐも甘きあはれなり
九のりハ佳き子ら句

夢の世や利休の目もよみぬはなをいそぐ侍の
似やふくや路の心もあはれん甘きあはれぬ
侍の甘きあはれぬの一滴もあはれぬあはれぬ

才十九

左

右人

おのゝ枝松のゆかり

右勝

左人

木くさしとあはれぬ唱生ゆき世目
わが三折の秋みよのふはれぬかひいそぐ
あはれぬ唱生ゆき世目あはれぬ唱生ゆき世目

才二十

左お

右人

香のぬきぬきあはれぬ

右

左人

香のぬきぬきあはれぬ

香のぬきぬきあはれぬ
香のぬきぬきあはれぬ
香のぬきぬきあはれぬ

才廿一

左お

右人

香のぬきぬきあはれぬ

右

左人

火煙のしつゝおやきりしききと焚き

口切の二りつうつて積りてしききと焚き
飯の樂いなる焼物や又大煙のしつゝおやきりしききと焚き
陽氣壯別妻浴大火燭燭又籍者寐則妻配之是
と以此れを也す燭燭のゆゑに瓜を言ふ人可なり
とつて

中二十三

左 右

をゆきしる所は掛巻をみるきり

右

きりしつゝおやきりしききと焚き

たのけしつゝおやきりしききと焚き

たのけしつゝおやきりしききと焚き
是一人あきりしききと焚き
きりしつゝおやきりしききと焚き
きりしつゝおやきりしききと焚き

中二十三

左 右

はへゆきをねほのほほとてん

右

けりしつゝおやきりしききと焚き

全ほのゆきしつゝおやきりしききと焚き
快ねほのかんをえりしつゝおやきりしききと焚き
おきりしつゝおやきりしききと焚き

中二十四
うらとらひてうとまうく用持り

左 孫

登山家く味味

果作のぬみそほきりくけり 納豆のみ

右

高貴家くみね

野人

一白粒を 味あき 吟を飲く

紫生まの森の木より 次めれく枯くならるるの林
から詰めのみそあき入く 乾坤を衣れり 居士世
其用功とあきあきく ぬの白貴家より 天たを後
この作を告をふとく なるし けむ表はあきく

中二十五
左 農丈

河神ふ店おれきうけをうく

右 孫

野人

ふうく 季のきききつくと 契き 漱けり
店おのぬみけを 肩のきん 一白きく ふうく 季の
何とれわくしに 是を 影ます

柳之齋主 桃青漫探 毫判

鮎のあゝ木はさくらら笑ふ鮎をまみらるるゆゑそよよ
とくも喜ぶ物の音こゝに四時今ふき鮎の泣き声は
其味のほくまゝをわらふをあらわす

秋風子

常盤屋の句合

中一番

左 膳

字よしくし八百屋の灯を焚し

右

と引と小松の系比とてあてて由

たの芳字八百屋の灯を焚きしゆゑそのひをうらまへて初音
からしむる心柄すゝもてその地の名はさうきりすゝて子
日の初を引とてさうてめしゝく侍をさし先八百屋の子の
かゝるゝ女をゆゑさう侍る仍以左侍録

中二番

左

左

里芋の長うり畠中おはすもやうんハ

右勝

善ハらしくしてを捨降手自然生

里芋無きて空所ハぬの山の暮自然暮た預生の字のぬひ

んてハらしくしてや但自然石自然木の影もしくし

すしきうをよふ文字力あつて一むくしうくひの影もしくし

才十六

右勝

右勝

善信自身をくくしを柳干の影もしくし

右

礼儀の信尺もや柳干の影もしくし受ル

たのふ文字先攻守あつて柳干の影もしくし
かのふ大根も食しをきりて影もしくし
い月あし未末柳干の影もしくし
晴の空うけしをぬくやとおもくし
殊勝子おわりつれ

才十七

左勝

暮山の雨 松茸のすくし

右

岩もろくも木らうけは身干せし

まろくも海苔山の向うぬれく松茸のすくし

けしきふら松茸のぬきし意味深しぬのすくし

左 肺

鉄とふすのそ性ふそふそ物とふす

右

水師のそーかんてんのかんハキイとよ玉

穀ハ性ヲ註シカンテンハ文字ヲトク増補献立抄ニ曰ク穀ハ風

味ノ切以酒煮以油煎則味愈厚シト云リ此方賞翫タルヘシ

才二十四

左 肺

大根生つ逆さつろをーいやわ人し

右

空のみ菜 男 嫩作りーまろき味

たのひぢらまろ屋の将こしけさ大根をわきーらーし

才の中北田園之種ーまひらる竹又取重

才二十五

左 肺

空の竹子今ハ地ーまろり白たま

右

肺力たま物系をぬまろーとよまふ

昔のそ家やの中のは何ハあつたやんさーしおふ

猿月の青物を何やまのまをぬまろーとよまふ

ぬまろらけ

竹ん厚さー魏しーまろー四百時季洞人才子文解とふ

かろーしーあふれは代ーまろーしー能治まろー

八音 柳の白根をいしとやいん

左 水柱

風を来る水柱をさう柳のふ 一掛

右 勝

門開の玉尾をいし柳の水柱は 翠風

水柱をさう柳の白根をいしとやいん
水柱をさう柳の白根をいしとやいん
水柱をさう柳の白根をいしとやいん
水柱をさう柳の白根をいしとやいん
水柱をさう柳の白根をいしとやいん
水柱をさう柳の白根をいしとやいん
水柱をさう柳の白根をいしとやいん
水柱をさう柳の白根をいしとやいん
水柱をさう柳の白根をいしとやいん
水柱をさう柳の白根をいしとやいん

左 柳 柳の白根

柳の白根をいしとやいん 李二

右

葉はく柳の白根をいしとやいん 仲冬

柳の白根をいしとやいん
柳の白根をいしとやいん
柳の白根をいしとやいん
柳の白根をいしとやいん
柳の白根をいしとやいん
柳の白根をいしとやいん
柳の白根をいしとやいん
柳の白根をいしとやいん
柳の白根をいしとやいん
柳の白根をいしとやいん

十音

左 柳 柳の白根

柳の白根をいしとやいん 七来

右

柳の白根をいしとやいん 孤屋

たのむさき新ゆれくきくみくみく
たのむさき新ゆれくきくみくみく
たのむさき新ゆれくきくみくみく

十一番

右 勝 取中

山里や取中とくくく人々外
親水

左

取中きぬかきんくくくく
取中きぬかきんくくくく
取中きぬかきんくくくく
取中きぬかきんくくくく
取中きぬかきんくくくく

十二番

左 煤掃

向すけりゆきゆきゆき
煤掃

右 勝

煤掃とくくく 寺とくくく 併とくくく 不ト

寺とくくく 寺とくくく 併とくくく 不ト
寺とくくく 寺とくくく 併とくくく 不ト
寺とくくく 寺とくくく 併とくくく 不ト
寺とくくく 寺とくくく 併とくくく 不ト
寺とくくく 寺とくくく 併とくくく 不ト

一物將不トのぬきぬきぬきぬき
一物將不トのぬきぬきぬきぬき
一物將不トのぬきぬきぬきぬき

